

## 荘村清志 (ギター) & 藤木大地 (カウンターテナー)

にほんの歌を集めて

### 曲目解説

「三月のうた」は、谷川俊太郎と武満徹の名コンビによる1965年の作品。堀川弘通監督のサスペンス映画『最後の審判』の主題歌で、初演者はジャズ・ヴォーカリストの後藤芳子。陰鬱な三月をうたうメロディが、一度聴いたら耳を離れない。

「さくらさくら」は、江戸時代末期に作られた、子どもに箏を手ほどきするための曲。歌として世に広まったのは明治以降と言われる。

「早春賦」は、1913年に発表されて以来、文部省唱歌の傑作の一つとして長年愛唱されてきた。長野県中部の安曇野一帯の初春の風景を描いた吉丸一昌の歌詞に、中田章が作曲。「賦」とは漢詩をつくることで、「早春に賦す」というのがタイトルの原義。

「朧月夜」は、1914年初出の文部省唱歌。春の淡い月夜が、洗練された日本語で歌われる。作曲者の岡野貞一は鳥取県出身。格調高い詞をつくる国文学者でもあった高野辰之とのコンビで唱歌の名作を残した。

「神田川」は、南こうせつがリード・ボーカルを務めていたフォーク・グループ「かぐや姫」のヒット曲で、1973年にシングル発売された。歌詞は、文化放送の放送作家だった喜多条忠が自らの学生時代の体験を綴ったもので、それを南こうせつに電話で伝えたところ、あっという間に曲ができたという。

「うたうだけ」は、谷川俊太郎と武満徹のコンビによる、1958年の作品。60年開催の草月ミュージック・イン「第2回ブルースの継承」で、日本の女性ジャズ・ボーカルの草分けとも言われる水島早苗によって初演された。

「なごり雪」は、「かぐや姫」のメンバーでもあった伊勢正三による作詞作曲。1974年にリリースされたかぐや姫の4枚目のアルバム『三階建の詩』収録。75年、イルカによるカバーがシングル発売され、大ヒットした。

「昨日のしみ」は、谷川俊太郎の雑誌連載企画のために、1995年に作曲された武満徹の最後の歌。ブルーなナンバーで、人生のほろ苦さを歌っている。96年6月の初演時、武満はすでに亡くなっていた。

「酒と泪と男と女」は、1976年に発表された河島英五の代表作。19歳の時に見た叔父の面影を歌ったという。2001年、河島は48歳で亡くなった。

「卒業写真」は、松任谷由実が旧姓で活動していた頃のヒット作で、1975年にリリースされた3枚目のアルバム『COBALT HOUR(コバルト・アワー)』収録。卒業ソングの定番で、多くの歌手によってカバーされている。

「翼をください」は、フォーク・グループ「赤い鳥」が1971年に「竹田の子守唄」のB面曲として発表。作詞は1960年代後半から70年代にかけて数々のヒット作を手掛けた山上路夫、作曲は「赤い鳥」のプロデューサーも務めた村井邦彦。合唱曲としても長く愛唱されている。

「時には昔の話を」は、加藤登紀子が1987年にリリースしたアルバムの収録曲。大ヒットした同年発売のシングル「百万本のバラ」のカップリング曲でもあった。若い世代にはスタジオジブリの映画『紅の豚』のエンディング曲としてお馴染み。

「めぐり逢い」は、1968年公開の東宝映画『めぐりあい』の主題歌として武満徹が作曲。60年代に俳優・歌手としても活躍していた荒木一郎が歌詞を書き、自身で歌った。武満徹の歌のなかでも、かなりポップス寄りの作品となっている。

「オリビアを聴きながら」は、杏里のデビューシングルで、尾崎亜美による作詞作曲。1978年にリリースされ、失恋ソングの定番となった。題名の「オリビア」は、英国の歌手オリビア・ニュートン＝ジョンのことで、曲中の女性が失恋中に聴くお気に入りの歌手として登場する。

「あの素晴らしい愛をもう一度」は、ザ・フォーク・クルセダーズを解散後、ソロ活動をしていた加藤和彦が、精神科医でミュージシャンだった北山修と組んで、1971年に発表したヒット曲。作曲に1日(加藤)、作詞に1日(北山)という短期間で作られ、2人で歌った。

「秋桜」は、さだまさしが作詞作曲を手がけ、1977年にリリースされた山口百恵の19枚目のシングル曲。小春日和に嫁ぐ日の、母娘の別れの寂しさを歌った。それまでの山口百恵のイメージを大きく変えた曲で、「日本の歌百選」にも選ばれている。

「ぼつねん」は、「昨日のしみ」と同時期に作られた武満徹の最晩年の歌。やはり谷川俊太郎の雑誌連載企画のために、1995年に作曲。歌詞は残酷なユーモアに満ちているが、独特の旋律がリフレインとともに耳に残る。

「今日の日はさようなら」は、1966年にハーモニセンターのスタッフだった金子詔一が作詞作曲し、翌年、森山良子の歌唱によりヒットした。NHK『みんなのうた』で放送されたほか、「日本の歌百選」にも選ばれている。

「MI・YO・TA」は、武満が1950年代に作曲したメロドラマ用の楽曲。生前に発表されることはなかったが、武満の死後、谷川俊太郎が歌詞を付け、1997年リリースの石川セリのアルバムで世に出た。御代田(みよた)は、武満の山荘があった町の名。

「時代」は、1975年にデビューした中島みゆきが2枚目のシングルとして発表。翌年リリースの1stアルバム『私の声が聞こえますか』では、中島によるギター弾き語りバージョンを聞くことができる。

「花」は、瀧廉太郎が1900年に発表した歌曲集《四季》の第1曲。日本における芸術歌曲を目指して書かれたという。文語調ながらも、上品な趣のある歌詞は、国文学者で歌人でもあった武島羽衣によるもので、隅田川の春の穏やかな情景を歌っている。